

## 西夏時代における河西を避ける交通路

前田 正名

【要約】 いわゆる西夏時代になると、従来の西域方面から河西通廊を通つて中原に来る東西交通路が断絶してしまつたので、河西の北側と南側とに河西通廊に並行して東西に交通する路が現われた。このことは既に定説となつているが、細部に亘つて西域方面から来る諸国の経過する地点に関して研究されていない。特に元豊四年冬十月拂秣國朝貢の史料解説については桑田六郎博士と榎一雄教授の意見が全然異つている。

西氏の論点は「種楹」に焦点を見出すが、この「種楹」の位置こそ当時の東西交通路の研究に重要なテーマとなる。本論文の中心は「種楹」の位置を今の哈密と考察したことである。そして元豊六年五月の于闐朝貢史料とともに嚴密な史料批判をしてみると、エジナ河筋を南下する河西縦断路や、韃靼方面からオールドス沙漠南縁に沿うて青唐城に至る路、沙州の西を迂回して青唐城に至る路などがあり、西夏を避けてその四周をめぐる國際交通路が存していたことをも見逃し得ない。元豊六年五月の于闐朝貢史料の解釈については定説とは反対に私は河西縦断路の交通史料だと考えた。

この論文は桑田・榎両氏の説の批判を行いつつ私見を述べ、定説の誤謬を糾したものである。

### 一、はしがき

咸平五年（一〇〇五）三月、李繼遷が靈州城を攻陥してから急に河西に対する西夏の圧迫が強まり、大中祥符八年

（一〇一五）と思われる頃に西涼府（涼州）が没し、次いで甘州は天聖六年（一〇二八）、沙州は皇祐四年（一〇五二）の朝貢を最後として宋朝との関係は杜絶えてしまう。<sup>①</sup>河西全土が

ほぼ西夏に掌握された時期は景祐四年（一〇三七）頃と考え

られるが、このような西夏勢力が河西という古来から有名な東西交通路を掌中に入れてしまうと、西域方面から宋朝に達する路は、河西通廊を避けてこの北方を東行して来るか、または南方を青海湖附近を通過して東行して来るか、いずれかの場合が多く、この点に關しては既に先学の指摘せられた通りである。<sup>④</sup>これは西夏が執つた重要交通路に対する態度と深く關しているが、その契丹・韃靼・青唐・宋などの間に介在していた位置から必然的に西夏が交通、交易上に極めて重要な意義を占めていたことを思うと、まことに注目すべきことであり、西域方面と中原との間の交通狀況を一変せしめていたのである。

宋朝に來朝してきた国には于闐・龜茲・大食・邈黎・拂菻等があるが、嘉祐八年（一〇六三）以降は殆んど于闐の独占時代とも言うべき状態になつている。于闐商人の北宋末における交易活動は目覚しく、遼河流域、熙州・秦州など殊に目立つた交易舞臺であつた。宋朝は屢々彼等に対し入貢制限を行つている。<sup>⑤</sup>喀斯羅の宋朝帰順が大きい原因となつて于闐の盛んな入貢が行われたことにも注意せねばならない。また王韶の熙河経略がすすみ、游師雄の奮闘めざ

ましく河州・洮州方面一帯の羌族を招撫して西傾山麓にも宋朝の勢威が伸び、特に游師雄が、威を西域までも及ぼしていたと言われる羌酋の青宜結鬼章を擒にしたことが元豐初年の邈黎・拂菻等諸国の入貢を促している事実を否定し得ない。<sup>⑥</sup>これらの国々の使者達は河西を避けて来るか、これに並行して北方韃靼の地を通るか、西域南道を沙州に到達する前に東南折してツァイダム盆地附近を通り、青海湖岸、青唐城、遼河流域、熙州、秦州等を経て中原に來たのである。このような通説に對して私は何も特に異論を挟むつもりはなく一応通説に拠つてはいるが、先学達の諸論考にはそれぞれ異つた主張が見受けられ、殊に重要な史料として誰もが必ず依拠した元豐四年拂菻國朝貢のことを記載した宋會要輯稿蕃夷四拂菻國、續資治通鑑長編卷三三七元豐四年冬十月己未の条について私見を有しているし、また宋會要輯稿蕃夷四于闐、續資治通鑑長編卷三三五元豐六年五月丙子朔の条に載する于闐使者の経過路順についてもいささか異見があるので、以下、この二史料をめぐる諸説の批判を中心として卑見を述べ、西夏時代の河西を回避する交通路について論じたい。



て「達靺」に次いで経過した「種楹」とは——これが本論の中心点となる語句であるが——必ず「種楹」または「種楹」の誤記であつて、それは宗哥城にはかならないとし、発音の類似から「種楹」「種楹」を「宗哥」に比定される。

したがつて拂菻國使者は、沙州近辺に散在していた「黄頭迴紇」、次いで「達靺」を通り、次いで宗哥城を経て董翟所居に來たという意味に解されているのである。博士は「回紇衰亡考」においては回紇の衰亡を論述することを主眼とされているので、特にこの元豐四年拂菻國朝貢の史料に現われる「黄頭迴紇」の存在を重要視して元代史料や西方史料と比較されているのであるが、「種楹」を宗哥城に考えたことが西夏時代の河西を避ける交通路の研究に重大な波紋を投じ、榎教授をして反論せしめたのである。

さて、榎教授は桑田博士が「種楹」を「種楹」「種楹」の誤りと見、宗哥城に比定されたことに疑いを挟み、それでは全く文意不通と言ひ、これは桑田博士の史料解説の仕方が悪く機械的に「次」をすべて「次いで」という意味に読むから誤解が生じたとされる。そして「次至黄頭迴紇、又東至達靺次至種楹。又至董翟所居次至林擒城」の

解説は、「次いで黄頭迴紇に至る。また、東して達靺に至るには種楹を経過して至る。また、董翟所居に至るには林擒城を経過して至る。」という意味に解しなければならぬのであつて、「達靺」と「董翟所居」の間に「種楹」が在ると考え、董翟所居に次いで林擒城を通過したと考えるべきではないと言われる。董翟とは当時、遼河流域を本拠地としていた青唐族(宗哥族)の大首領であつて唃廝囉に次いで襲位し、青唐城(今の西寧市)に居たのであるから、桑田博士に従えば「黄頭迴紇」を通り「達靺」に東行し、青唐城に行くその間に「種楹」が存在するのであり、それがいわゆる宗哥城——今の樂都県と西寧市との中間、湟河北岸——であるが榎教授によれば「種楹」と宗哥城とは何等関係なく、「種楹」とは「黄頭迴紇」を経て「達靺」に行く途中において通過する地名なのである。

林擒城(林擒城)は宋史卷四九二吐蕃傳の臨谷城のこと、これは宋史卷八七地理志西寧州寧西城の条に「舊名林金城」とある林金城に違ひなく、この点、桑田博士が林擒城を宋史吐蕃傳の臨谷城に比定されたのを肯定されている。西大石を西大食とし、灼昌城を鄯善とし、「黄頭迴紇」を

沙州近辺に散在していた回鶻（以下本論では普通の場合、回鶻と書く）とし、董璠所居を青唐城とし、林擒城を林金城とする考えについては諸家の説の一致する所で、安倍博士も「黄頭迴紇」を「甘肅あたりに散らばっていた」と述べている<sup>⑤</sup>。要するに桑田説と榎説との最も大きい見解の対立は「種楹」の位置についてである。これを考究することが元豊初年頃の河西をめぐる東西交通路に関して重要な手掛りとなる。

## (2) 問題の所在点

桑田博士の論じるように拂菻國使者が舊于闐に来る前に新福州を経過したが、この位置をカシュガル方面かヤルカンド方面に考えたのは誤りである。前節に紹介したように「次」をすべて博士は「次いで……を経過した」意のように解される所からこの誤りが生じたのであつて、当時のイスラム勢力の東進の状況を考えると到底、そのようなターリム盆地西部に「于闐王の所居たる新福州」が在つたとは思われない。元豊初年の于闐王の居る位置はもう少し東方で舊于闐の東側に在つた。トグズ・オグズ Toghuz-Oghuz の一氏族が起源だと言われているカラハーン王朝 Qaraxan

khānids（一名、イレンク・ハン国 Ilek-Khan）は、九—十世紀頃において東は沙州付近、西はアム・ダリアまたはシル・ダリア付近の間に堂々たる大国を形成していたビシバリク Bishbarik 王国、すなわち西ウイグル国の一部に包含されていたものであつたが、十一世紀の初め、全盛期に入り、一〇〇〇年と思われる頃（宋、咸平三年）にはユスフ・カズル・ハーン Youqouf Kadr Khan が于闐を攻撃して一〇〇五年（宋、景德二年）頃までには于闐の仏教寺院を悉くモスクに模様換えした。この于闐の攻陥は大きなターリム盆地南縁地域の政治的事件であつて、この後イスラム勢力は東に伸張してロブ・ノールの岸边に達したのである。もちろんこの時までにはカラハーン王朝はブハラ Bulhara を攻陥し中亜に侵入している<sup>⑥</sup>。新興の大勢力となつたイスラム教信者であるユスフ・カズル・ハーンは一〇二五年（宋、天聖三年）頃までにはカシュガルをも支配するようになっていた。ユスフ・カズル・ハーンこそ宋代史籍に登場して来る于闐王黒韓王にはかならないのであるが、以上のようないスラム世界東進の形勢から判じると元豊初年の于闐王の所居であつた新福州は舊于闐の東方と考えられカシュガ

ル方面やヤルカンド方面とは倒底考えらず、グレナード Genard が既に指摘した通り于闐王の都は攻陥した舊于闐の東方に移され、東に拡大された新しい支配領域に応じていたのである。<sup>⑩</sup>

このような事実に基づいて史料の解説は当然、于闐王の所居たる新福州に至るには舊于闐を經過して行く意味にとらねばならない。

次に桑田博士のような「達靺」を経て「種靺」を通り董靺所居たる青唐城に到る意味に解すると、甚しく無理なコースを辿ることとなり、また西夏が河西を支配していた形勢と比較してどうにも解せない道程となつてくる。「達靺」から「種靺」——宗哥城——に来るには河西を南北に縦断せねばならないからである。しかも宗哥城から董靺所居の青唐城、この西方の林擒城——林金城——に來たという意味に問題の一文を解すれば拂菻國使者は宗哥城から西方に何のために道を選んだか解らなくなり、たとえ當時の国際的交易都市として諸國商賈の集つていた青唐城下に一時、立寄ることは考え得られるにしても、さらに西方の林金城にまで進むように「次」を解して読むことは理解でき

ない、ここは必ず榎教授のように「また、東して「達靺」に行くには「種靺」を經過して至り、また、董靺所居に至るには林擒城を經過して至る」の意味に読まねばならないと思う。林擒城——續資治通鑑長編の林擒城——は宋史吐蕃傳の臨谷城、同書地理志の林金城で、それは宋の西寧州の寧西城であることは明かであり諸説の一致する所であるが宋史卷八七地理志西寧州の条に

西寧州舊青唐城。元符二年隴拶降建爲鄯州、仍爲隴右節度。東至保塞砦五十七里、西至寧西城四十里……

とあるが、青唐城西方四十里に位置していたという寧西城については同条寧西城の項に

寧西城舊名林金城改今名東至湯厮廿二十里西至厮哥羅一百里南至京鶻嶺二十里北至金谷峽四十里

と明記が見えることにより確められよう。このことから董靺所居に至るには林擒城を經過して行く意味にこの一条は解さねばならず、したがつて前文もこれに倣つて「種靺」の位置こそ不明のままにしても、「達靺」に至るには「種靺」を經過して行く意味に解さねばならない。桑田博士が元豊初年の特殊事例として河西を南北に縦断して「達靺」から南山々脈中を南下して遑河々岸の「種靺」すなわち宗

哥城に来る交通の行われた点を論証していない限りにおいて、私は同博士が種榼―宗哥説を出されたことに不満であつて、榼教授に賛成である。

しかし桑田博士が前後の歴史的背景を無視して軽々に河西を縦断して遼河々岸に来たかのような考えを説かれたのと同様に榼教授の説にも欠陥はあつて、何より同教授が種榼―宗哥説を否定され、「黃頭迴紇」と「達靺」との間に「種榼」が在るとして史料を読まれているに拘らず、一向に重要な「種榼」の位置に関して触れていないのである。「種榼」の位置について一言も費さずに、林擒城と青唐城との地理遠近の關係から考えられた点については不安を覚える。「達靺」に至るには「種榼」を経過するという意味に読まねばならないと断定するには正しくは「種榼」の位置の論証がなければならぬ。<sup>⑩</sup>

前述したように宋會要輯稿蕃夷四拂菻國の条に記された元豐四年十月六日の朝貢記録の舊于闐王所居たる新福州に至る事実や、末文の青唐城と林擒城との關係からして私はどうも榼教授の説くように、「種榼」を「達靺」、「董種所居」（青唐城）の間に考えられぬと思ひ、種榼の位置を考

えてみたのであるが、その前に精細に河西の周辺交通路やオールドス沙漠縁辺交通路の状況を調べて、桑田説成立の余地が全然ないものか、もう一度振り返つて考えたい。

### 三、「達靺」より青唐城（董種所居）に

#### 通じる交通路

#### (1) 達 靺

上述の「達靺」は塔坦、達達、韃靺などと書かれることもあり、箭内互博士によると大体において漠土に近い熟韃靺を白韃靺と呼び、彼等は大体陰山付近に居た。また漠北遠く漠土を距たつた者は生韃靺であり、彼等は黒韃靺と呼ばれたと言ふ。そしてエジナ河と陰山との間には所謂「九族韃靺」が居住し、彼等は一名阻卜の名で現われ、金史の阻鞞と遼史の阻卜は同じく韃靺を指したものであるとされている。この箭内博士は多くの蒙古史家の支持を得て、白鳥庫吉博士をはじめ、松井等、小野川秀美、王國維、王靜如、青木富太郎等諸氏の見解とほぼ一致している。<sup>⑪</sup>

遼史に現われる阻卜部は契丹の勢威が西進していくと頻りに契丹に朝貢し、殊に太康四年（宋、元豐元年（一〇七八））、

太安二年（宋、元祐元年（一〇八六）の間殆んど彼等は契丹への朝貢を欠いていないことは遼史卷七〇屬國表に拠つても瞭然としている事実である。阻卜部は契丹の「西鄙」に

違ひなかつたが、陰山西方、今のアラシアン沙漠に散居し、河西東部の北方に當つて族帳を展げていた。本論では阻卜部についてこれ以上詳細に亘つて述べないが、阻卜部はエ

ジナ河下流域より西方には到底、居たと考えられず、「阻トが韃靼である」という定説に従うと、達靼の西方限界はすなわちこの阻卜部居住地域に當ることとなり、沙州付近、

まして沙州の西方まで達靼の領土は考えられない。故前田直典氏はかつて「十世紀時代の九族韃靼」において阻卜部と韃靼との同一説を取りながらも、王延徳が高昌に赴く途

中出遭つた九族韃靼はオルドス沙漠からオルホン河流域に行く途中のこととして、王延徳がエジナ河流域を経て西行

していく路を辿つたと説かれてきた説を否定されたが、<sup>⑩</sup> そうなればいよいよ達靼の西限地域をエジナ河流域以西とは考えられない。大体、達靼の西限地域は陰山西方と漠然と考

えられていたのであつて、元史卷六三地理志河源附録に拠ると「達達」（達靼、韃靼と同じ）とは陰山、賀蘭山付近及

びこの近くを流れる黄河流域一带を意味している。このよ  
うな考えは箭内博士も持たれている。<sup>⑪</sup> 新五代史卷七四夷  
附録に載する達靼の条には

本在奚契丹之東北。後爲契丹所攻、而部族分散。或屬渤海、別  
部散居陰山者自號達靼。  
と見えることも、以上のような考察を確めるものである。

宋人は達靼の位置を河西の北方から陰山付近にかけて考  
えているが、回鶻の東に接していたものとしている。續資  
治通鑑長編卷三四六元豐七年六月己巳朔の条に

上初手詔李憲曰、回鶻與吐蕃近世以來、代爲親家。而回鶻東境  
與韃靼相連……  
とある。回鶻の大集団は周知のように甘州、沙州、高昌及  
び龜茲等に在つたが中でも甘州回鶻が最大で宋代史籍に回  
鶻と記載されてある場合は普通甘州回鶻を指すことが最も

多いことを考えると「韃靼が甘州回鶻」の東に隣接してい  
たこととなり、エジナ河流域にさえ及ばないこととなろう。

同書卷三三五元豐六年五月丙子朔の条に  
上願謂樞密都承旨張誠一曰、達靼在唐與河西天德爲鄰。今河西

天德隔在北境。……



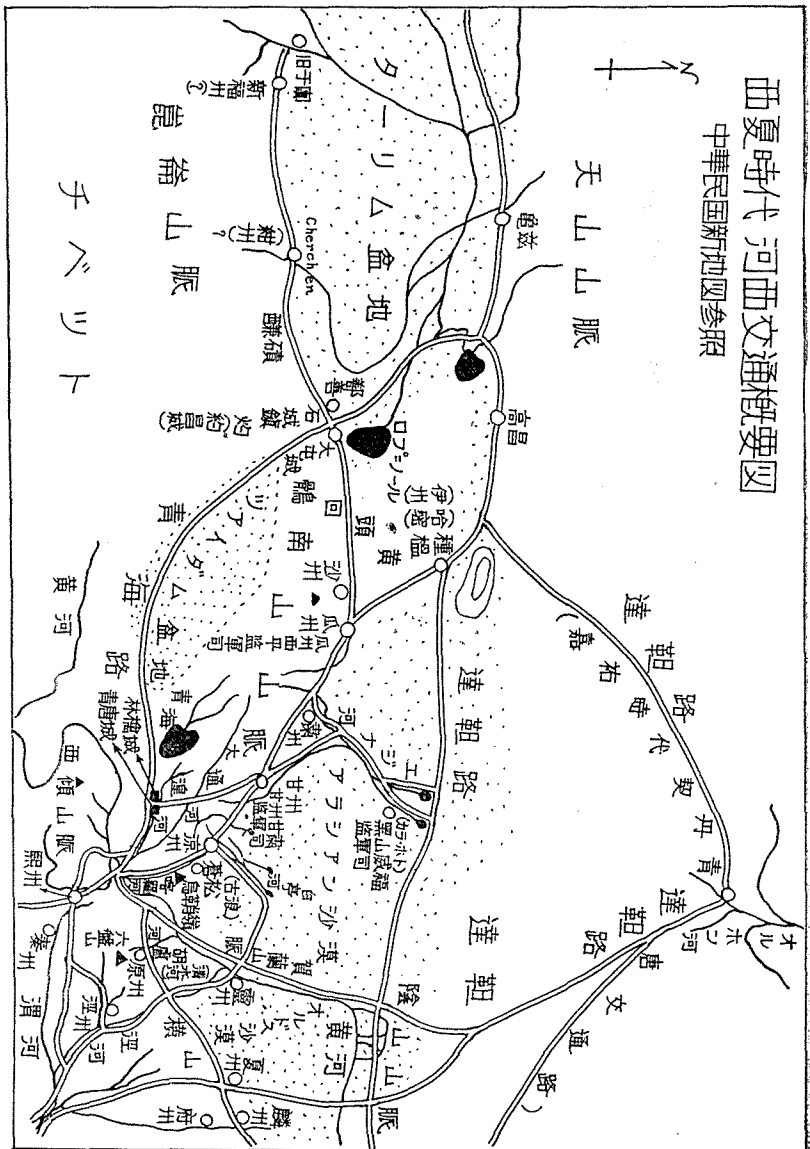
とあり、天徳軍とも隣接していることと考えられていたから甘州北方のアラシアン沙漠より東方、黄河大彎曲部付近にかけて達祖と称されていたことは確実である。宋朝が西夏を包圍攻撃するために青唐族、回鶻とともに達祖を利用しようとしていることが明かで、續資治通鑑長編卷三四六元豊七年六月己巳朔、同書卷四七一 元祐七年三月丙戌の条などに現われている。事実、元祐六年には「韃靼」は賀蘭山後面に南侵したことが續資治通鑑長編卷四七一 元祐七年三月丙戌の条及び西夏書事卷二八等に伝えられている。

このように達祖の位置を考察してみると、達祖から湟河々岸の青唐城に達するにはエジナ河流域に沿うて南下し、甘州付近から南山々脈の山谷を縫うて湟河北岸に来るか、または陰山付近からオルドス沙漠中を南下して湟河流域を西に辿るかのどちらかであろう。靈州路経由は西夏の中心部を南下してくることになる以上到底不可能なことである。もしエジナ河筋を南下して甘・涼州方面から南山々脈中を湟河北岸まで来たものとすれば、西夏の有名な黒山威福監軍司（カラホト遺址、エジナ河口岸）や甘州甘肅監軍司（甘州）の在つた地域を通り南下せねばならないこととなり、

普通西夏が河西通廓を制圧している場合考え得ない順路である。一体に西夏は河西を守備するため監軍司の配備は極めて慎重に考慮して交通路上の要地は洩れなく管轄下に置くようにしていた。瓜州西平監軍司は瓜州からロブノール方面や伊州、高昌方面に対する河西西端部交通路分岐点のまことに重要な地域を制圧していたものであり、黒山威福監軍司は伊州方面から東行して河西の北側を陰山麓に到達する途中の要地、古の漢の故居延城の地に配置され、エジナ河筋に沿う河西の縦断路の北出口を抑えたものであつた。これに対し卓囉監軍司は本城卓囉城を今の莊浪河、当時の喀囉川下流域に建てこの河西縦断路の南出口を拘扼したものであつた。黒水鎮燕監軍司は賀蘭山北方に陰山との間に置かれ、靈、興州方面に南下する路及びエジナ河方面から東行して陰山麓やオルドス沙漠に来る路を制し、甘州甘肅監軍司は肅州、涼州に通じる古来の河西路及び甘、靈州間の路を制していた。このように西夏は見事に河西付近の主要交通路の要地を掌握して、各監軍司は厳しく通行諸国人を監視していた。したがつて「達祖」から「董氈所居」に縦断したことは理解し難い。ここは榎教授のように読ん

# 西夏時代河西交通概要圖

中華民國新地圖參照



で林擒城—青唐城—宋廷と来たと考えねばならぬと思うが、オルドス沙漠南縁に沿うて契丹と青唐城との間に盛んに往来が行われていたことは注目せねばならぬ。西夏の周辺に発達していた国際交通路を検討する意味で、しばらく考察してみよう。「達鞬」からこの交通路を辿つて青唐城に達せられないこともない。

(2) オルドス沙漠南縁交通路

桑田博士の達鞬、種楹（宗哥城）、董壘所居（青唐城）の順に拂菻國使者が通つたとする説を成立せしめ得る余地は、やや東方寄りに回り路になるけれども陰山麓からオルドス沙漠を南下して夏州付近において西南行し、オルドス沙漠の南縁を縁取る横山の麓に沿うて西夏の左廂に属する諸監軍司を縫つて六盤山麓を過ぎ蘭州付近で黄河を渡り湟河流域を西行したと考える以外にない。そして元豊初年においては確にこの路は存在していた。

嘉祐四年（一〇五九）契丹は唃廝囉（青唐族大首領）に遣使し、相共に連繫して涼州を攻撃しようとしたが果さなかつたことがあつた。西夏書事卷二〇嘉祐四年冬十月の条に左の記載が見える。

冬十月、契丹約西蕃兵取涼州・不果。契丹數遣使、由回鶻路至河。○。○。約唃廝囉舉兵攻夏國、欲徙董壘居涼州與之。近訛麗聞之、増兵備河西、會廝囉以道遠兵難合、乃止。

回鶻路に由つて河湟の唃廝囉に屢々遣使していることから、この頃の前後には契丹と青唐城との往来は「回鶻路」に由ること多く、すなわち陰山付近から西行してアラシアン沙漠を過ぎ、沙州の西南を迂回して青海湖岸を経、青唐城に達したことが解る。この場合、回鶻路とはオルホン河畔經由路か、陰山西麓より西行してエジナ河口を経由する路か不明であるが、黒水鎮燕監軍司、黒山威福監軍司の位置を考察すると、陰山北方をオルホン河畔を西に過ぎて行つたと考へるのが妥当であろう。<sup>⑧</sup> こうして沙州西方から東南折して青唐城まで来た契丹使者達の往来はまことに壮大な規模の交通路を現出せしめていると言わねばならない。ここに西夏の交通上の重要意義がある。

太唐八年（宋、元豐五年（一一〇八二））宋軍は西夏の靈州を攻めて失敗し、直後、西夏は蘭州北方間近く迫り、翌年にはその大軍が蘭州を攻撃した。しかし宋夏兩陣營の対立から西夏は努めて契丹に平和的態度に出、友好關係を維持し

ようとしている。契丹自身も西夏の依頼によつて董氈に使者を通じ、西夏と青唐族との和解を試みたこともあつた。

西夏書事卷二六元豊五年夏四月の条に

復因遼人請和于董氈

梁氏慮西蕃與中國合累使、請和不獲。遼遣國使者同至青唐、  
說之。董氈以荷宋厚恩義、不敢負辭。

と見える。青唐族と宋とが提携するのを怖れて、契丹使者として董氈に赴いているのである。これは全く西夏と契丹とが互に危険なく友好状態にある証拠であつて、宋は頗る契丹の青唐遣使を気にしている。宋會要輯稿蕃夷六吐蕃元豊六年八月六日の条に

詔聞々、可下李憲遣使開諭董氈阿里骨、以契丹與宗哥相去極遠  
利害不能相及、令堅守、前後要約協力、出兵攻討西賊。

とあつて、いかに頻繁に契丹使者が青唐城に赴いたかその一斑を察し得る。この道程は沙州の西回りではなく、むしろオルドス沙漠南縁に沿うて行われたことは、契丹、西夏間の国情が嘉祐年間と大いに異つていたこと、元豊時代に契丹、西夏の両国人が盛んにこの交通路に由つて往来していたことなどで察知される。續資治通鑑長編卷三一四元豊四

年秋七月壬辰の条に

上批、麟州路最當契丹夏人交通孔道。

とある。麟府路とは麟州、府州路で横山の東北端部であるが、ここが契丹と西夏との交通上の孔道に当つていたと言う。元豊年間に入ると屢々西夏軍が無定河流域や麟州方面に東侵するが、彼等が靈州方面と麟州方面との間に横山北麓沿いに交通していたことは既に元豊五年九月、宋軍の重要拠点永樂城が陥落した後、横山南麓まで拡がった西夏勢力を思うと理解されよう。

契丹の勢威もオルドス沙漠を蔽うていた。咸雍七年（宋、熙寧四年〔一〇七二〕及び太康元年（宋、熙寧八年〔一〇七五〕）には吐蕃の契丹來貢が行われ、回鶻もまた屢々、契丹に來貢した。<sup>⑧</sup>吐蕃とは青唐族のことで王韶の熙河経略に應じて彼等が契丹に通じるようになったのも自然の勢いとも考えられる。前述したように太康四年以降（宋、元豊元年以降）阻卜部の契丹朝貢が頻繁に行われるようになり、咸雍六年十一月、契丹が回鶻と阻卜部との間に在つた生熟鉄を鬻ぐことを禁じた事実は契丹が甘州近くまで支配圏を拡げていたことを示すものである。<sup>⑨</sup>契丹勢力西進期にはオルドス沙

漠西部近くまでその勢力は波瀲していたと考えられるのであつて、契丹に依つて西夏を避け沙漠を南下することは可能であつた。續資治通鑑長編卷四七一元祐七年三月丙戌の条に環慶経略使章察の言を載せて、

而塔坦獨以隔遠、未知嚮化之路。今若於河東或遼川界求間道、遣使至塔坦、陳述大宋威德、因以金帛賄命、撫之。使出兵攻擾夏國、以與遼川相爲犄角……

と見える。これは西夏に対して宋が達紐を利用しようとした態度の現われであるが、宋から達紐（塔坦）に達するのには河東か、または遼川界から行くことであつたらしい。前者の場合は契丹勢威下を縫つて西北行し、後者の場合、河西縦断略を北上することになるが、いずれも間道と言うのはそれぞれ容易でなかつたからであろう。事実、契丹の抄掠の甚だ怖しかつたことを、元豊六年五月に于闐の使者達が述べていること（後述）を思うと、この路も西域方面諸国が青唐城に赴く迂回路として困難のように見えてくる。

その上、西夏左廂の監軍司が石州、宥州、鹽州などに置かれ横山麓を警備し、今の清水河下流から寧夏中衛方面を西壽監軍司が守備していたことを考え合せると、西夏を避

ける交通路としては非常に危険なものと言わねばならない。たしかに青唐城方面と陰山東部方面との間にオルドス沙漠南縁路に由る交通は行われたが、西域方面諸国からここを経由して青唐城に達したとは到底考えられない。

ここに注意しなければならないことは當時有名な王韶の熙河経略の結果として、特に前述のように羌酋青宜結鬼章の擒獲によつて元豊初年以來、遼黎、拂菻等遠西諸国はじめることであり、秦州方面、熙州方面と湟河流域との間に活潑な往来が行われたことである。このような西域方面諸国の宋への來貢の事情に應じて契丹の阻卜や西方対策が考えられねばならない。ともかく元豊期に入ると、契丹の勢力が張り、元豊中期以降はオルドス沙漠南縁の横山麓にも西夏の支配が及び、これら二国は宋に対するために共同して青唐族と和好しようとしている。太康八年（宋、元豊五年）二月、西夏は捕えた宋將張天一を契丹に獻じ、同年六月に西夏は契丹に來貢していることが遼史本紀に見えるが<sup>10</sup>、当時の兩國の友好關係を物語つているものと言ひ得る。この故にオルドス沙漠南縁に沿うて契丹、西夏の人馬交通が

為され、特にここでは契丹の青唐族への遣使が為されたことに注意しなければならぬ。このように考えると元豊四年冬十月、宋朝に来貢した拂菻國使者が報告した拂菻より中原に来る経過路について振り返つて考察すると、桑田博士の説くように達靼、種楹（宗哥城）、董璪所居（青唐城）の順路を来たすと論ずることは不当となり、オルドス沙漠南路はただ契丹と西夏との関係においてのみ青唐城方面との交通路として考えられるべきものである。ただ西夏の東側に契丹と青唐族の間に頻りに往来の行われたことは、前述した契丹の河西の北方、西方を遠く迂回して青唐城に達した交通とともに西夏の周囲に行われた国際交通の一として注目されねばならない。

(3) 元豊六年五月・于闐朝貢記事の批判

——河西統断路——

オルドス沙漠南路を通じて達靼から青唐城に西域方面諸國が来たことを示すように見える史料がある。通説として前掲史料とともに、河西を避けて中原に来る東西交通路が存したということの例示によく引用される史料で、数少い西夏時代における東西交通関係史料である。すなわち宋

會要輯稿蕃夷四于闐、元豊六年五月一日の条に左の記載がある。<sup>50</sup>

五月一日、于闐貢方物、見于延和殿。上問曰、離本國幾何。曰四年。在道幾何時。曰二年。從何國。曰道由黃頭回紇、草頭達靼、董璪等國。又問曰、留董璪幾何時。曰一年。達靼有無酋領部落。曰以乏草粟、故經由其地、皆散居也。又問、道由諸國有無抄略。曰惟懼契丹耳。又問、所經由去契丹幾何里。曰千余里。四日詔于闐國大首領、畫到達靼諸國距漢境遠近圖、降附李愬。嘗有朝貢、委愬遣人假道董璪使達靼故也。

元豊六年五月朝貢した于闐の使者が神宗の間に答えた言葉であるが、これに拠れば于闐の使者は「黃頭回紇」「草頭達靼」を経て董璪の國に来て、ここに一年留つた後に宋廷に達したのである。在道四年という言葉から推せば青唐城における一ケ年の滞在を考えさせて「黃頭回紇」、「草頭達靼」を通過したのはおそらく元豊五年夏以前のことで、元豊二年——四年の頃に違いない。

「草頭達靼」については詳しく解らないのであるが、達靼の一部に間違ひなく、したがつて前述したようにエジナ河以東、陰山麓に至る間になければならぬ。漠然とこれ

を沙州付近かツァイダム盆地方面に考えて「青海路」を通じて来たという従来の説は誤りである。<sup>⑩</sup>

これは青海湖岸を通つたと解するためにはまず「草頭達」が沙州西南に居たことを論証しなければならぬ。しかし達靼の一部かまたはその別名かと考えられる限りにおいて、「草頭達靼」はエジナ河流域以西に居たと考察するのは無理である。当時の達靼と呼ばれた地域の範囲については前述した通りで、これに基いて于闐の使者達はアラシアン沙漠の北部を経過したものとせねばなるまい。間もなく神宗が彼等に達靼諸国の漠境を去る地理遠近の図を画かせていること、神宗の問に対して直に達靼部落之粟の状を答えている態度などは達靼の地を通らなくてはできぬことである。たとえ一歩譲つて「草頭達靼」が沙州西南に居たとし、ここを通り董氍所居の青唐城に来たものと考えたとすれば、「契丹を去ること千余里」の路を通つたという報告をどう解するか疑問であろう。こうしてこの史料はアラシアン沙漠北部方面から青唐城に南下したこととなり、中間經由地を記さないから何とも言えないが、このままの文意を素直に採ればどうしても河西を北から南に縦断して来たことに

なりそうである。しかし、そうすると普通、西夏を避けて当時の諸国が交通した状況から考えると頗る理解に苦しむ所である。ここに前章において論じたようなオルドス沙漠南縁路を通つて西南行したという考えが成立しないことはない。そうして前々章において紹介した元豊四年冬十月、拂菻國朝貢記事とともに達靼、青唐城間の交通史料と解し得ないことはない。<sup>⑪</sup>

しかし全然別な特殊事情が西夏内部に発生していた。續資治通鑑長編卷三二六元豊五年五月辛卯の条に左の通りの記載が見える。

詔沈括李憲苗授、據環慶路經略司奏、蕃官阿齊言、夏國母自三月初點集河内、西涼府羅彭界、甘肅瓜沙。十人發凡人、欲諸路入寇。人馬已發赴興州。及四月丁丑西賊二萬餘人騎侵犯淮安鎮。

自去歲興師以來、惟患羌賊逃避官軍致不能大有尅獲賊。

元豊五年三月初より、西夏の国母、すなわち梁氏が西涼府羅彭界、甘、肅、瓜、沙州の人々を發して河内に点集し、諸路入寇の準備をしたのであつたが、右に掲げた通行本的光緒刊本長編では「十人發凡人」となつてゐるが嘉慶刊本も同じく「凡」となつて、河西全土の西夏の兵すべてが河

西から河内に徴されて行つたこととなるが西夏書事や西夏紀には「凡」の代りに「九」となつて、河西の兵が十人中九人が東行してしまつたと言ふ。ともかく元豊五年五月、環慶路経略司の秦に拠れば三月初めから河西には殆んど西夏の兵が居なくなつたという審官阿齊の言があつて、重大な変化が河西に起つている点に注目する必要がある。当時の宋夏の激しい戦いに対する西夏陣營の意気込みである。

この異変が西夏の右廂である瓜州西平監軍司、黒水鎮燕監軍司、甘州甘肅監軍司などの各監軍司の守備を殆んど空虚な状態としたことは申すまでもない。莊浪河流域を守備したと考えられる卓囉監軍司さえ、おそらくこの形勢下に在つては涼州方面と蘭州方面との重要交通となつていたこの莊浪河谷の守りを通常通り行い得たとは考えられない。元豊五年夏頃に草頭達韃から董璠の国に來たと言ふ于闐の使者達は同年三月初頃から起つたこの河西の異変に乗じてエジナ河筋を南下、甘州か涼州の南方の山谷を縫う遼河北岸に達し得たに違いないのである。

がんらい四川盆地、洮水流域、遼河流域、と于闐方面との間の交通路の一として、一度遼河北岸から北上し南山々

脈を北に突き切つてエジナ河上流に出、ここから河筋に北上して河口付近において西行して行く路があつた。梁の慧皎の高僧傳卷十三興福第八釋法獻の条に拠ると、彼は元豊三年(四三五)に金陵を発し、正蜀、河南、芮芮を経て于闐に行くが芮芮を通説通り蠕蠕と解し、河南を吐谷渾と解すればどうしても彼の行路は遼河流域を北上して南山々脈中を縫うて甘州か涼州の南に出、エジナ河筋に沿うて北上したものと考えないわけにいかない。これはほんの一例に過ぎない事実であるが甘州南方から大通河谷を縫、遼河支流である北川河流域に沿うて西寧盆地に入る路と、涼州(五代、宋初の西涼府)の東南方、当時の蒼松(昌松)すなわち今の古浪縣付近から烏鞘嶺の峠路を南に越えて莊浪河——宋代には喀囉川と言われる——流域を蘭州の北に南下して来る路が古來から河西の縦断路として存していたことが知られる。たまたま西夏内部の突発事情によつて、于闐の使者達がこの交通路を利用したただけのことであり、西夏は常ににおいては厳しくこれを守り、黒水鎮燕は北出口であるエジナ河口を、卓囉和南は南出口である莊浪河口、遼河口を守備し、この二監軍司の中間に甘州甘肅監軍司が右廂の



中心的存在として重鎮していたわけである。

つまり、元豊四年冬十月拂菻國朝貢記事に關し桑田説の欠陥を補う意味で元豊時代のオルドス沙漠南縁に沿うて遼と青唐城との間に交通が行われ得たことを指摘し、この結果に基いて元豊六年五月于闐朝貢記事を批判してみると、その史料は青海路を辿つてきたとする通説と反対にかえつてオルドス沙漠南縁沿いに西南行して来たと考えられたのであるが、詳しく当時の西夏事情、特に河西守備の状況を検討してみると、意外にも遼とエジナ河筋を南下し遼河北岸に達する古来からの河西縦断路を辿つたものと考え得ることになつた。

要するにこの元豊六年五月の于闐朝貢使の経過した道程を単に「青海路」として都合のいいように片づけてきた通説は全く誤りであつて、逆に事情が許せばエジナ河筋を南下して遼河流域に出て闐、熙、秦州等を経て東行する入貫路の存したことを物語るものである。したがつて西夏時代における河西を避ける東西交通路の研究にとつてはあくまでも特殊事例であつて、西夏の占める國際交通上の重要意義を知ることには止めるべきものである。

さて論を最初に戻して元豊四年冬十月拂菻國朝貢記事に對する私見を述べよう。

#### 四、種榦についての考え

このように論をすすめてくると西夏時代、河西の南北兩側に展開した東西交通路に關しては最初に揭示した拂菻國朝貢記事が唯一の貴重な手掛りとなつてくる。前述した通り、桑田博士の所説を末文の「次」の解釈、新福州と舊于闐の位置から考へた「次」の解釈などからどうにも従い難く、結局、榎教授の説くように種榦は宗哥城を指すのではなく、遼と行くには種榦を経過して行く意に解さねばならぬと思う。それも種榦の位置を決定しなければならぬ。「黃頭迴紇」（以下、本史料引用以外、黃頭回鶻と書く）の位置は明代になるとツァイダム盆地西部に居住していた。<sup>②</sup>元代には肅州方面にも居たことは元史卷三八至元元年六月辛酉の条に

辛酉、有司言、甘肅撒里畏。産金銀。請遣官稅之。

と見える所からも窺われる。それは酒泉縣附近が古来から有名な金の産地であつたから、撒里畏が金銀を産したとい

うことはこの辺にも撒里畏が居たことを示すからで、ここに言う撒里畏とは元史の他の箇所に記載される撒里畏吾でサリウイグル、すなわち早くも白鳥博士が述べられた黄頭回鶻にほかならない。<sup>⑧</sup>元史卷一太祖六年辛未、同二十一年二月の条、卷六〇地理志西涼州下肅州路、沙州路の条などには太祖が西涼府、肅州、沙州を攻撃したこと、輝和爾とが来降していることなどの記録が散見するので、輝和爾とは普通、回鶻を意味する以上、明代にツアイダム盆地西部に居たという黄頭回鶻は元太祖の攻撃を浴びて河西々部から西移したものであろう。言うまでもなく、唐末會昌初年に西走した回鶻は甘、沙州、高昌、龜茲に大集団を為して定住していたが、ロプノールから沙瓜州方面に一带に散布し、肅州方面にも黄頭回鶻と呼ばれる回鶻が居たことは確かである。

達靼とはエジナ河西方を称したと思われなから(前述)、問題の一文を「次いで黄頭迴紇に至る。又、東して達靼に至るには種糧を經過し……」と読めば種糧はエジナ河流域から西方、この得体の知れない、ロプノール、沙、瓜、肅州に拡つていた黄頭回鶻との間になければならない。

しかし、この一文の直前には舊于闐を經過して于闐王所居となつていた新福州を經、灼昌城(約昌城)に至ると于闐の界である、と書いてあるから(舊于闐と新福州の位置は史実に従つて読んだ)、灼昌城から黄頭回鶻に達し、ここから種糧を經て東行し、達靼に行くこととなる。宋會要輯稿の灼昌城、續資治通鑑長編の灼昌城は共に鄯善の意であるとすゝる通説には従うが、安倍博士の所論のようにその有名な鄯善城を Charchen の位置に比定するよりも、むしろ私は Charkin に比定したい。唐光啓元年書寫沙州伊州地志殘卷に拠れば、沙州の西方一五八〇里に石城鎮があり、この城の東方一八〇里に屯城、西方二三〇里に新城が在る。石城鎮北方四里に蒲桃城が在つた。薩毗城は石城鎮西南方四八〇里に在つて、吐蕃や吐谷渾の往來の多かつたことが伝えられる。<sup>⑨</sup>F. W. Thomas の言うロプ湖三城、或はロプ湖四城がこれであるが、屯城は一名小鄯善と呼ばれ、西方の鄯善大城に対して称されていたという。当時の于闐王の勢威がロプノールの岸边まで伸張していたと考えられること、中国の地名の称呼は時代が下ると国境から遠く離れた地名を中原に近い地名に転用して称する場合が多いことなどを

ら、唐末に小鄯善と呼ばれていた屯城をも北宋末には鄯善と称されていたと考えていても決して無理なことではない。鄯善城の位置が達紐方面と青唐族方面とに行く路の岐路になつていたことを考えると、いよいよ鄯善を Cherchen に比定するよりも屯城所在地、ロブノール西南岸に近い所と考える方が妥当であろう。ロブノールは石城鎮の北方、三二〇里に位置していた。<sup>⑩</sup> スタイン卿は伊循城すなわち屯城を Charkik に比定しているが、藤田豊八博士によればスタイン卿が扞泥城の位置に比定した Miran の地は水経注所伝の通りで正しく、北魏の時の鄯善城とは漢代の伊循城であろうとしている。博士によれば石城鎮を伊循城西方に書いた唐代記録に疑問が存するようであるが、<sup>⑪</sup> ここでは省き、鄯善城を意味する灼(約)昌城とは Charkik の西方一八〇里に在つた石城鎮とする沙州伊州地志殘卷を信じることにしておこう。<sup>⑫</sup> とすれば鄯善城が于闐東界であり、沙、瓜、肅州方面に散布していた黄頭回鶻を通り達紐に向う途中に経過する種榦とは瓜沙州付近の北方に当るのではないか。さてここに五代の頃の重要な河西と于闐との間の記録がある。有名な高居誨の使于闐記である。新五代史卷七四四

夷附録第三に引かれているこの記録に拠れば仲雲と称された部族が沙州西方に居り、牙帳が胡盧磧に在つたが、晋使が大屯城（七屯城、屯城）に到達すると宰相以下多くが迎えている。晋使は仲雲界を西に出て「磧磧」を渉り于闐の紺州に行くのであるが、仲雲族の威を瓜沙の人々が怖れていたということである。左に示すと、

其西渡都郷河、曰陽關。沙州西曰仲雲。其牙帳居胡盧磧。云仲雲者小月支之遺種也。其人勇而好戰、瓜沙之人皆憚之。胡盧磧漢明帝時征匈奴屯於吾盧、蓋其地也。地無水而嘗寒多雪。每天暖雪銷乃得水。匡業等西行入仲雲界、至大屯城。仲雲遣宰相四人都督三十七人、候晉使者。匡業等以詔書慰諭之。皆東向拜。自仲雲界始涉磧磧。無水掘地得濕沙、人置之罍以止渴。又西渡陷河。伐置置冰中、乃渡。不然則陷。又西至紺州。紺州于闐所置也。在沙州西南。云去京師九千五百里矣。

仲雲は音韻の類似から種榦と同じと考えられる。種榦を右文中の仲雲と同一と解するとどうやら問題が解決されそうである。<sup>⑬</sup> しかしながら仲雲を沙州の西方とし、大屯城に入ると仲雲の宰相等が迎え、また仲雲の界を出て西行するという文意から推せば、仲雲の根拠地は大屯城のように思え

る。餘磧はロブノール西南から于闐方面に行く途中の有名な悪路であつて、沙州、瓜州からロブノールや伊州、さらに高昌方面に向う途上に在る唐代の莫賀延磧、または大患鬼魅磧と異るもので島崎昌教授指摘のように西域水道記に現われる徐松の見解は誤つてゐる。徐松はこの高居誨の記録を引いて

又高居誨使于闐記云、沙州西曰仲雲族。自仲雲界始涉餘磧、皆由此以達于闐……或曰流沙、或曰餘磧、即今噶順諸程。唐人謂之莫賀延磧、又謂之大患鬼魅磧見王延德使高昌記

と述べてゐる。たしかに大唐大慈恩寺三藏法師傳卷一之十  
一には玉門關外西北行の難路を記して

關外西北又有五烽候、望者居之。各相去百里中、无水草。五烽之外即莫賀延磧。伊吾國境間之惡憤。所乘之馬、又死不知計。

とあり瓜州北方伊州間の莫賀延磧の難行を示してゐる。諸書を案ずるに餘(纏)磧とは明かに Charkik 付近から「紺州」方面に行く難路であり、文中の大屯城は前掲の光啓元年書寫沙州伊州地志殘卷や壽昌縣地鏡の屯城、新唐書地理志に載する七屯城である。すなわち前述の漢代の伊循城で

あつて、仲雲族がロブノール南西岸地域に拠つていたことは明かであるが、それでは高居誨が何故、その牙帳は胡盧磧、つまり漢屯田の故地として有名な吾盧(伊吾盧、伊州)に在るとしたのであろうか。

清の陶保廉は高居誨のこの矛盾した記載に疑を挟み、高居誨が胡盧磧を伊吾盧と考え、ここに牙帳が在つたと述べたのは誤りで、仲雲族牙帳は必ず古樓蘭の地である大屯城に在つた筈であるとし、胡盧磧とは必ずしも伊吾盧の地に限らず、西域地名に多く胡盧と冠せられる地名があり、後に哈刺と冠せられる地名の多いことを論じて胡盧磧とは哈刺磧にほかならずと断じてゐる。

それでは仲雲族がロブノールに居たことの説明にはなるが、高居誨が何故、仲雲族の「牙帳」が伊吾盧に在つたとしたことの非であるかを説明するに不充分で、彼の論にも欠陥はある。瓜沙の人が皆これを憚る程の威勢を有する仲雲族は余程、後晉の頃に大きい勢力を持つていたと考えられることと、陶保廉の説に拘らず、唐代以来、胡盧と名称される地名は殆んど蕃部畜牧の好地であつて、哈刺と胡盧が音韻上類似するからと言つても哈刺を冠する語が元代

以降に広く用いられるようになっていたのであつて、唐末、五代に胡盧磧と言えば通常、伊州のことを指している事実などから、<sup>⑩</sup>私は高居誨の言を信じて陶氏の説は受けられぬと思う。文中に見える通り、牙帳には雪多く、寒く、天暖の時、雪解水で仲雲の人々は潤されているのであつて、このような報告は伊州、すなわち伊吾盧の地である。ここは盆地であり、西北に標高四〇〇〇米を越える山嶺が聳え小流が南西流してこの盆地に流れ込んでいる。<sup>⑪</sup>乾燥地形中の盆地気候を記したものと考えられ、ロプノール岸の気候を指していないことは明白で、このような胡盧磧を陶氏のように大屯城付近を言うとは理解できない。

要するに仲雲族の牙帳は今の哈密、漢代伊吾盧、唐代の伊州の地に在り、強盛を誇つて居たために瓜沙の人々をも脅威し、ロプノール西南岸地域にも支配圏を及ぼしていたものである。そして要地であつたから大屯城に使臣を配していたのは当然である。<sup>⑫</sup>ともかく胡盧磧を今の哈密の地として、仲雲族居住地は哈密盆地を中心に広く拡がついてたと考えたい。

考えを戻して、拂菻國の使者が灼（約）昌城（于闐東界の

ロプノール西南岸地域）、沙瓜州北西の黃頭回鶻、種楹すなわち今の哈密の地、達靺（エジナ河の東方）と辿る交通路を報告したとするとまことに自然な道程である。種楹を仲雲と考え、黃頭回鶻から達靺寄りに種楹が位置せねばならぬから、種楹をロプノール岸に比定すれば全く史実に合わなくなつてくる。ここはどうしても高居誨の記載を信じて仲雲族牙帳を伊吾盧（哈密）とし、したがつて種楹をここに比定せねばなるまい。宋初にこの地は唐代同様に伊州と呼ばれているが、河西からここを経て天山東部や于闐方面にも交通しているから、河西を通れない西域諸國はロプノール南西岸地域からここを経て河西の北側を東行したのは当然であらう。<sup>⑬</sup>

拂菻國の使者は「達靺に行くには種楹を経過して行き、董靺所居に行くには林擒城を経過する」の意味を言っているのであつて、決してはつきり彼等の經由地を述べたわけではない。しかしながら掲げた文の最後に「青唐城に至れば乃ち中國の界に至る」と見えるので、おそらく普通よく言われてきたように、ツアイダム盆地、青海湖岸、を通じて青唐城まで辿つて来たことが考えられ、文章の解説を覆

教授のような読み方に同意すれば、この一文は前文の河西（南北側交通路を説明した後に、筆を改めて東行して青唐城に到達する場合の多かつた事情を示しているものであろう。河西の北側の「達靺路」と、その南側の「青海路」との分岐点はロプノール南岸の南方に当り、黄頭回鶻はこの辺にも散在していたものであつて、その故にこそ灼昌城（約昌城）——鄯善——、黄頭回鶻、種榼（仲雲）、達靺と経過する北路と、黄頭回鶻、林擒城（林金城）、青唐城と辿る南路とが報告されているのであり、石城鎮東南四八〇里に在つた薩毗城付近に人々の往来不絶であつた状態も理解される。<sup>④</sup>

## 五、むすび

私は従来、軽々しく利用されて簡単に河西の南北西側に出現した西夏時代の「達靺路」と「青海路」の二交通路に關し引用された既述の二史料を嚴密に批判してみた。この場合、最も見解の対立がはつきりし、また本論文の焦点である「種榼」について桑田博士と榎教授とが論じた所説に對する批判を中心として、元豐時代の歴史的背景、西夏を

めぐる國際情勢、交通状況の検討を加え、さらに詳細にこの問題の一史料の吟味をした結果、定説とされていた考えとやや異なる私見を持つようになつたのである。その要約を記すると左の通りとなる。

(1) 元豐四年冬十月、拂菻國朝貢記事は定説通り、河西の南北側の東西交通路、すなわち「達靺路」と「青海路」との存在を示すものであるが、

(2) 文中の「種榼」とは桑田説のような宗哥の意味ではなくて、「仲雲」であり、おそらく今の哈密の地域を指すと考えられ、したがつて、「達靺路」はロプノールから哈密を経て東行したものである。

(3) 史料の読み方は榎説に同意されるが、元豐時代にオルドス沙漠南縁路を西南行して青唐城に達する路——西夏の東側を青唐城に向う交通も盛んに行われたことは、沙州の西側を迂回して契丹から青唐に達した交通とともに重視せねばならない。ここに西夏の交通上の重要意義を知らねばならぬ。

(4) 元豐六年五月、于闐朝貢記事は定説と反對にエジナ河筋から河西の甘、涼州付近を南に下り、南山々脈中

を縫つて遼河北岸に來た例で、西夏の特殊事情に基く特例であるが、むしろ、河西縦断路の例として扱わればならない。

- ① 宋會要輯稿方域二一西涼府、同蕃夷七歷代朝貢、群書考索後集卷六四四夷方貢、續資治通鑑長編卷八五、同卷一〇六、同卷一七三、玉海卷一五四。
- ② 藤枝晃氏「沙州歸義軍節度使始末」東方學報京都十二の三、十三の二。
- ③ たとえば宋會要輯稿蕃夷七歷代朝貢、元祐七年二月二十八日、紹聖三年五月七日。
- ④ 續資治通鑑長編卷四〇二元祐二年六月甲申、宋史卷三二二游師雄傳、同卷四九二吐蕃鳴騶。
- ⑤ 續資治通鑑長編卷三一七元豐四年冬十月己未の条では、你厮都令斯孟判の你在偏に、皆四十程の程が里に、約昌城が約昌城に、種糧が種糧になつてゐる（通行本の光緒刊本）。嘉嘉刊本では約昌城を灼。昌城とするのは明かに灼の誤り。静喜堂文庫蔵宋刊本續資治通鑑長編撮要には欠く。
- 群書考索後集卷六四四賦門四夷方貢には単に「元豐四年貢方物」とのみ見える。
- 文中の「新福州」は宋史には「新復州」となつてゐる。
- ⑥ 藤枝晃氏は「沙州歸義軍節度使始末」（東方學報京都十二の三、十三の二）において単に河西の南側、青海湖近辺の東行する交通路が利用されたことを指摘するのに引用され、「李繼遷

の興起と東西交通」（羽田博士頌壽記念東洋史論叢）において西夏時代東西交通路の型を指摘してゐる。安倍健夫博士は近著「西ウイグル國史の研究」四六〇頁、四八〇頁において東西記録の比較をされて注意された。宮崎市定博士も「支那周辺史下」所収「宋代のトルキスタン」の中でツアイダム盆地を経て東行する路をこれにより説かれてゐる。

しかし、これら藤枝、安倍、宮崎等諸氏の説は桑田、榎両氏の所説程に異つた見解を示さず、概ね河西の南側の東西交通路が北宋代に盛んに利用されたことを説いてゐる。

⑦ 宗哥城の位置については榎一雄教授「王韶の熙河経略に就いて」（蒙古學報一）補註⑤に詳しく。

⑧ 安倍健夫博士「西ウイグル國史の研究」一二三頁、藤枝晃氏も特に異論は出されてゐない。

白鳥庫吉博士「西域史上の新研究」（西域史研究上）トルコ語の Sari. または Sarigh. は微黄を意味すると説かれ、黄頭迴紇にうつて述べられてゐる。

⑨ W. Barthold, 'Turkestan down to the Mongol invasion', p. 267. p. 254—p. 281.

安倍健夫博士「西ウイグル國史の研究」三七九頁、四一六頁、四五八頁、四七二頁、

R. Grousset 著後藤十三雄訳「アジア遊牧民族史」二二八頁、二二九頁。

⑩ Grenard 'La légende de S. B. K.' J. A. 1900. p. 61. p. 67—p. 68.

⑪ 榎教授は前掲論文の註⑤で述べているが、ここは主として宗哥城の位置考証を行われた時に触れたものであつて決して主題となつて論じられたわけでない。

⑫ 前内亘博士「韃靼考」(蒙古史研究)に拠る。

松井等氏は「契丹可敦城考」(満鮮地理歴史研究報告第一)において、「阻卜考」という一節を掲げ阻卜とは韃靼であると考えている。かつて前田直典氏も「十世紀時代の九族韃靼」において(東洋學報三二の一)阻卜と韃靼との詳しい関係は不明であるが、おそらく諸家通説の通り、阻卜＝韃靼と考えるべきであろうと述べた。

小野川秀美氏「汪古部の一解釋」(東洋史研究二の四)、王静如氏「論阻卜與韃靼」(国立中央研究院歷史語言研究所集刊二の三)王國維氏「韃靼考」(王忠懿公遺書增訂本觀堂集林卷十四、青木富太郎氏「韃靼」(世界歴史大辭典)

⑬ 前田直典氏「十世紀時代の九族韃靼」(東洋學報三二の一)

⑭ 前内亘博士「韃靼考」(蒙古史研究)

⑮ 天徳軍の位置については和田清博士「豊州天徳軍の位置について」(史林一六の二)

⑯ 回鶻路については陰山北方をオルホン河畔に北上し、カラバルガッスン Kara Balgasun に達し、哈密、高昌方面に西行するものと、アラシアン沙漠を西行しエジナ河下流域を過ぎて行くものとの二路の考えがある。従来、後者が定説として採られてきたが、最近故前田直典氏が前掲論文中で前者を重視し、王延徳の高昌に向う路もおそらくオルホン河畔を経由したものと

と考えられ、安倍健夫博士もこれに賛意を示されている。

西夏紀事本末の巻首圖に拠ると、陰山西麓を韃靼界、契丹界、興州界の間とし、ここに黒山威福監軍司を位置せしめている。この圖は誤りが多いから信用できないが、黒水鎮燕監軍司と取り違えたものであろう。

⑰ 遼史卷二二、二三、遼史卷七〇屬國表。

⑱ 遼史卷二二咸雍六年十一月乙卯契丹の西域方面經營と阻卜部との関係については、岡崎精郎氏「墨離軍と遼の対西域関係」(史林四〇の一)に詳しい。氏に拠れば瓜州西北千里に置かれた唐の墨離軍が史上から姿を消して三百余年を経た契丹天顯三年に再び現われるとし、契丹は阻卜部を貢せしめてこの墨離軍と連繫しようと言っていると云う。氏はまた通説に従い、阻卜部を韃靼、達靼と見ている。

⑲ 遼史卷二四太康八年二月己巳、同六月丙辰。

⑳ 續資治通鑑長編卷三三五元豐六年五月丙子朔にも見える。

㉑ 宮崎市定博士「宋代のトルキスタン」(支那周辺史下)藤枝晃氏「沙州歸義軍節度使始末」(東方學報京都十二の三、十三の二)

㉒ 桑田博士は前掲論文においては、達靼は西夏を包含する語意をも有すると説かれているが、簡単な語釈に過ぎず、これ以上述べられない。

㉓ 静嘉堂文庫藏、宋刊本續資治通鑑長編撮要に見えない。

㉔ 西夏の右廂卓囉監軍司については別に專稿があるので近く発表したいと考えている。



- ②⑤ この点、東洋文庫の松村潤氏の助力を得た。
- ②⑥ 白鳥庫吉博士前掲論文。
- ②⑦ 安倍健夫博士「西ウイグル國史の研究」四八〇頁。
- ②⑧ 東洋文庫蔵、敦煌文獻「*T'ia* 五、第七冊、N. 367. 羽田亨博士「唐光啓元年書寫沙州伊州地志殘卷に就て」(羽田博士史學論文集、森鹿三教授「新出敦煌石室遺書特に壽昌縣地鏡につき」)(東洋史研究通卷第十卷第二号)
- ②⑨ F. W. Thomas, 'Tibetan texts and documents concerning Chinese Turkestan', Part II. The Nob Region.
- ③⑩ 晋天福十年写本壽昌縣地鏡(森鹿三教授前掲論文)にも同じく屯城北方三二〇里に蒲昌海が在つたことを記載している。この文獻は民国三十一年尙達氏が敦煌で発見したものである。大体、スタイン卿の蒐集した光啓元年書寫の沙州伊州地志殘卷と同じであるが処々、異なる箇所も見られる。
- 藤田豊八博士は「西域研究」(東西交涉史の研究、西域篇)において漢代文獻の記録、水經注、唐代文獻の記録を比較して論じられている。
- ③⑪ Stein, 'Serindia', Vol. I, p. 318.
- ③⑫ 藤田豊八博士前掲論文。
- ③⑬ 詳細を避けるが藤田博士の所論にも疑点があり、ロプノールルの水位が漢や北魏の時代と唐代では非常に異つていることを念頭において史料批判をせねばならぬと思う。
- ③⑭ 種楨と仲雲の音韻の類似については島崎昌教授の示唆を得た。特記して同教授に謝意を表したい。
- ③⑮ 徐松「西域水道記」卷三哈刺淖爾所受水の「(黨河)西支注於淖爾」の条、島崎昌教授「白龍堆考」一、二、(中央大学文学部紀要史学科一号、二号)
- ③⑯ Stein, 'Serindia', Vol. III, p. 1144—p. 1145. 瓜州西行一〇〇里で野馬泉に至るとあり、莫賀延磧は鳥、獸、水のない沙漠と述べている。
- ③⑰ 元和群縣志卷四〇隴右道下伊州、宋史卷四九〇高昌伝参照。
- ③⑱ Stein, *ibid.*, Vol. II, p. 1331. 新唐書卷四〇地理志、西州交河縣蒲昌の条。
- ③⑲ 陶保廉「辛卯侍行記」卷六に據れば紺州を下膝に比定している。安倍健夫博士は Charchen と考えられている。
- ④⑰ 陶保廉「辛卯侍行記」卷六。
- ④⑱ 胡廬はチベット語意の「群れる」意。
- ④⑲ 中華民國新地圖第四十七圖。
- ④⑳ Stein, *ibid.*, Vol. III, p. 1147, 'The historical role of Hami' の中で哈密の概概に触れ、その大きい史上の役割を述べらる。卿は沙瓜州方面から西行する場合のロプノール岸の Lou-lan のように、北行して天山東部に至る要地であると言う。
- ④㉑ 岡崎精郎氏は史林四〇卷一号に「墨離軍と遼の対西域關係」を掲げ、仲雲族に触れるが沙州西方に居たとのみ述べるに止り、島崎昌教授も「白龍堆考」二(前掲中央大学紀要)において特に詳論に及ばなう。
- ④⑳ 宋史卷四九〇干闥國伝乾德四年の条。
- ④㉑ 唐光啓元年書寫沙州伊州地志殘卷及び壽昌縣地鏡に拠る。

# Geographical Significance of the Communities in Central Andes

By

Takaaki Sasaki

The existence of the communities, called ayllu, in the central Andes area had been well-known for a long time. Taking formerly enlarged families as their unit, they were a kind of living community combined with regional marriage, economic community which held cultivated land, irrigation waterway and pasture in common and assigned lots, and a unit of administration.

After the Spanish conquest, some of these communities that were deprived of their material foundation of existence were dissolved promptly; on the other hand, many held by various factors preventing the dissolution were in a gradually changing process. As native culture of such communities was comparatively well reserved within them, foreign culture developing over the communities could be gradually mixed with theirs; therefore, the national culture has been formed, characterizing the central area of Andes as it is. In other words, the national character of the central Andes area has been growing in the changing process of the communities.

## The Traffic Routes Without passing *Ho-hsi* (河西) in the *Hsi-hsia* (西夏) Era

By

Masana Maeda

In the so-called *Hsi-hsia* (西夏) era, there appeared the routes from west to east through the north or south side of *Ho-hsi* (河西) parallel to the *Ho-hsi* passage, because of interception of the old traffic route from the central Asia to *Chung-yüan* (中原) through the *Ho-hsi* passage; which is established as a theory, though its detail still remained unknown.

Especially on the interpretation of the historical material about the tribute-bringing by the *Fu-lin* empire (拂菻国) in October of the 4th year of *Yüan-fêng* (元豐), there is an absolute difference in views between Dr. Rokuro Kuwata and Prof. Kazuo Enoki. The very point

of their views is found in "*Chung-wên*" (種糧), and its location is an important theme for studying the then traffic routes from west to east.

The main purpose of this article is to consider the location of "*Chung-wên*" (種糧) which should be *Yin-mi* (吟密) of the present day. Under the close investigation of the historical material about the tribute-bringing by *Yü-tien* (于闐) in May of the 6th year of *Yüan-fêng* (元豐) also, there are found the route cutting vertically Ho-hsi southwards along the Etzina River, the route from *Tatar* (韃靼) area along the southern edge of the Ordos desert to *Ch'ing-t'ang-ch'êng* (青唐城), or the route round the west of *Sha-chou* (沙州) to *Ch'ing-t'ang-ch'êng* (青唐城); this means the existence of international traffic routes passing the surroundings of *Hsi-hsia* (西夏), contrary to the established theory.

### On the Reformation of Military Administration by the *Choshu* (長州) Clan in the *Keio* (慶応) Era.

By

Akira Tanaka

Trying to trace the bearer of the *Meiji* Restoration directly to the league of reform parties, one will find its difference from the class disposition in the restoration administration. This contradiction seems to be caused by the interpretation of accepted articles which discussed leadership-league relation of the Restoration administration from the *Bunkyu-Genji* (文久・元治) era at a leap, without any concrete analysis focusing the most important period for the anti-Shogunate party or the *Keio* (慶応) period.

Therefore, the analysis of the *Choshu* (長州) clan in the *Keio* period as a main wing of the anti-Shogunate is the subject to be carried out. In this article our point is set in the reformation of military administration in the 1st and 2nd years of *Keio* (1865-66), for the reason why leadership-league relation appears plainly in military power especially in the revolutionary stage, to reveal its difference from the league of reform parties. Establishment of leadership by "military officers" in the anti-Shogunate—this is the very subject of this article and also our conclusion.